

徐福伝説

ニギハヤヒは徐福か（92・9・17）

工藤 憲 男（昭22・理）

徐福は秦の始皇帝を騙して日本に亡命したというのが、中国や日本における一つの定説になっています。ところが私の友達の台湾出身の人にいわせると神武天皇が徐福だったという事を云う人がいるんです。それから韓国の古い本では、神武天皇というのは高句麗百済系の扶余が海を渡って熊本に行ったプリンスであるとしています。

私の生まれたのは香川県の白鳥という所で白鳥神社がありますが、白鳥神社は日本武尊が死んで白鳥になって飛んで来たという事になっています。白鳥が飛んで来てとまったとか羽根が落ちてきて止ったとか、そういうのが全国白鳥神社がある所にある訳です。僕は白鳥をトータムとする部族がいたところに白鳥神社があるのではないかと思っています。

史記という本を読みますと、徐福は最初秦の始皇帝に、不老不死の薬が蓬萊の島にあるからスポンサーになってくれという事で資金を出させて乗り出して行くのですが、なかなか帰ってこな

い。それで側近の中に「あんた騙されたのよ」といわれて、「ひよっとしたら騙されたのじゃないかと」始皇帝が考え出します。徐福と同じ方士で始皇帝に仕えていた連中が、始皇帝が徐福を疑い出した事に気がついて、自分たちにも類が及ぶと恐れて逃げ出しているんです。いよ／＼これは騙されたという事で方士たちを探索しているんです。その逃げた方士を見つけたかどうか知りませんが、儒教学者は始皇帝によって穴埋めされています。始皇帝は儒教の徳治主義を嫌い、自然科学派の方士を重んじていたのです。それが騙されたとなると穴埋めどころか焼き殺されたと思います。

ところが、方士たちが逃げ出したその後徐福は戻ってきているのです。もし徐福が騙して亡命したのならそういう事の情報は必ず入っているのに、のこ／＼と徐福は戻って来て、しかも前よりももっと多額の資金を出させているのです。色々な説がありますが、最低八百人の若い男女を引き連れて、大きな船を仕立てて乗り出しているんです。彼は始皇帝をだまして亡命したのではないかと思っていいたら、たまたま朱砂が砂金以上に高価だったという記事が目に入っただけです。不老長寿の薬は水銀の朱、つまり昔、書道で直す朱ではないかと考えたんです。朱は化学では硫化水銀ですが、発癌性があるという事で今禁止されていますが、昔は赤チンの原料でした。防腐剤ですから、防腐剤のコールタールを精製したクレオソートが食あたりの薬になるように、それを丸めて丹薬として飲んでいたのでないかと思っただけです。朝鮮の人に聞いたら、

今でも韓国では飲んでいる人がいるそうです。水銀朱は塗れば防腐剤になりますし、飲めば食あたりに効く。人間死ぬのは体の中から腐るからで、その腐りをとめれば長く生きられるのじゃないかと昔の人は思っていた。ミイラなどの棺に塗ったり、朱砂を棺に入れておくのもそういう気持ではないかと考えたんです。朱塗の御殿は木に防腐剤として朱を塗ったものです。金以上に貴重品だった朱塗りの御殿は金箔を張った金閣寺よりもブラックスで、今でいえばプラチナ張りの御殿みたいなものです。

徐福は秦の始皇帝を騙したのじゃなくて、水銀朱が日本にあるという事が分ってそれを掘るために乗りこんで来たのではないだろうか、その時につれて来たのが白鳥をトードムとする物部族であったのではないだろうかという風に考えたのです。「白鳥伝説」という書物を谷川健一という学者が書いておりますが、それを読むと白鳥神社のある所の近くには丹生（にぶ）という地名があって、そこは水銀の朱が出る所である。水銀というのは銅か金とが出る所だということです。谷川さんは、青銅の文化遺跡を探るため、鍛冶の神様の一つ目の神、ギリシヤ神話でいいますとクロノスですか、一つ目の巨人の神です。鍛冶屋は炉の火を見つめるため目がつぶれて片目になりやすい。ふいごを足で踏み続けるので足を痛めてビッコになりやすい。山本勘助は片目でビッコだったと言われていますが、彼は鍛冶師であったのでしょうか。少くとも祖先が鍛冶師であったと思います。武田軍団の信仰する趣訪神社の祭神は鍛冶の神であったようです。

白鳥神社のある私の町のすぐそばに丹生町という町がありました。また安戸（あど）池という入江を持った引田町が隣にあります。天孫降臨のニギハヤヒの兄と目されているニギハヤヒの命は、旧事記では大和の哮（いかるか）峰に降っています。旧事記は徳川時代までは古事記と並んで尊重されたのですけど、徳川時代の誰かがあれはにせものだとい出したことで信用失墜している本です。にせものとかインチキと言いつせば、古事記、日本書紀も怪しいものです。史記でさえその時の王様に具合の良いように改作しています。しかし、その中の記事は参考にしてもよいものがあります。ニギハヤヒの命は、引田物部など多くの物部を引き連れて斑鳩いかるがの峯に降り立った。その時のキャプテン、船長ふねぢやうは跡部、舵取りは阿刀です。安東、安部などは海人系の氏族です。安土桃山の安土も同類ですから、引田町の安土池は天の鳥船と言われたニギハヤヒの乗ってきた船の船長にゆかりのある入江だということになります。徐福が朱を求めて日本に来たなら、丹生が関係する。丹生に関係した海人が跡部、阿刀なら、ニギハヤヒは徐福か徐福の親類となります。徐福は鉱山技術者であって、水銀朱を日本で掘るために船団を仕立てた。その船団の海人が阿刀氏だったと考へ、日本各地の徐福伝説と朱の関係を探る気になったんです。

たまく／＼早稲田大学の松田寿男博士の「丹生の研究」が手に入りまして、それを読むと、日本で二十箇所ある徐福が来たという伝説のある所は全部水銀朱がある鉱山か、あるいはその近くに上陸したと思われる様な港にある所です。

日本とは黄金の島といわれていますが、金とか銀とかいうのは水銀と一緒に出やすいですから、中国から見れば日本列島は金・銀・朱の宝庫でありました。その事情を徐福を連れて来た海人たちは知っていたのです。徐福は海洋民を通しての情報が分っていたので、確認のために日本を訪れたと思うのです。あるいは、仕掛人は徐福ではなく、安東、阿刀氏となっていた安曇（あずみ）海人であったかも知れません。安土津臣（あつしのみ）は縮まればアツミになりますから、安東氏がたむろした津_二港の臣です。我々の同級生にも渥美君がいるけど、彼は多分安曇海人の末裔ではないかと思えます。「安曇の磯良」というのはからだにカキや藻をつけた河童みたいな神様ですが、多分「持衰」と言われた男性シャーマンが神格化されたと思えます。

松田博士は徐福のあとを探そうと思って一所懸命全国を探したのではなくて、丹生氏の信仰していた丹生津姫神社を探して、朱の産地を全国くまなく調べておられます。おかげで僕は随分と参考にさせていただいているのですけど、その丹生津姫が郷里の丹生に關係して水主神社の祭神孝靈天皇の娘の大和のモモソヒメに変わっているのです。松田先生の説では、丹生津姫はミツハノメ（水天宮祭神）にもなる。阿蘇山ではイワタツ（岩を割る）姫にもなっています。美保の松原の美保にもなりますし、丹生という音は徐福伝説の金立山の近傍の仁比山の仁比にもなります。また、ニフという音を入という字で表しているため、後に一入（ひとしお）のシオと読んで塩という名に変わっている土地もあるのです。

松田博士の丹生津姫がミツハノメに変わったという推理は、高野山の地主神高山明神ほか高野山五所明神といって五つの神様を祀っている神様の一つがミツハノメで、その神様だけが女神であることからです。高野山は水銀朱の宝庫です。弘法大師の父方は朱の宝庫であった豊後竹田から佐伯市を拠点とした佐伯氏ですが、母方は阿刀氏です。引田町と引田というのは物部引田臣、つまりニギハヤヒの命が引き連れてきた物部部族の一つです。宮下文書という富士山麓の阿蘇神社に伝わる古文書では、考靈天皇は徐福の相談相手になっている天皇ですから、その娘のモモソ娘、(僕は火火(ボボ)姫と思っているのですが)が、丹生津姫ではないかと思っています。

引田臣の引田は、九州の日田ヒタ(もとは日高)あるいは飛驒山土の飛驒、みんな水銀が出ますので、朱を掘る物部の引田臣がおった所が引田町になり、阿刀氏がいた港湾が安土池になり、引田物部が祀ったのが白鳥神社であると思います。水主神社の祭神と目される丹生津姫を祀ったのは引田物部ではなく、物部グループを率いた大物主であるニギハヤヒか、その子孫のように思うのです。

最低八百人の男女を連れ徐福たちが日本に来たのは、一ヶ所だけでなく、何ヶ所かに分かれて朱・金・銀を掘るためであった。八百人が八十人ずつに分れても一〇ヶ所ですが、それぞれの鉱山で水銀朱を掘るために定着した。彼らが中国江南から水田耕作の技術をもってきたことで日本の水田耕作が始まったか、本格的なものになったと考えたのです。日本が縄文から弥生に変るの

は水田耕作のはじまった時です。いふなれば産業革命の走りが弥生革命ですけど、水田耕作が面の広がりではなく、点の広がりとして非常に早く青森にまでいつているのです。そして、青森のすぐ下の半島に徐福伝説が残っているのです。西日本からゆつくりと面的な広がりで広がっていかず、そんなに早く点の広がりをしているのは、徐福グループがいくつかに分れて定着したからだと思います。亡命をしたのならそんな点の広がりをする筈がない。万一、追及の手が及ぶことを恐れますから、なるべく固まって住んだはずです。

徐福伝説の残っている所を調べて、安東、日高、丹生などの地名がワンセットあるか、あるいは徐福に関係する神様オシホミミとかモモソ姫やモモソ姫の父のフトニを祀ってあるかを調べていこうと思っています。そうすれば朱の採掘技術者であった徐福グループが神格化されて、ニギハヤヒやニギになつたのではないかという、僕の仮説が証明されると思うからです。徐福はどこに上陸して、最後はどこで死んだのかというのが興味の対照になるでしょう。

旧事記ではニギハヤヒの命の弟になっているニギの命が降りたつたという伝説のある鹿児島港は水銀に関係がある所です。ニギがニギハヤヒの弟という旧事記の記事が正しければ、ニギの子孫の神武天皇はニギハヤヒの父の子孫になります。神武天皇はイワレ彦で、石神という一般名称です。ニギハヤヒが徐福か、徐福の子供であれば、徐福が神武天皇であるという、中国人の民間伝説は当たっていることになります。

神武天皇は養子じゃないかという説もあるのですけど、今の皇室はともかく、徐福は一番最初の皇室の入り婿になったのかも知れませんが。現人神（あらひと神）は、文明人が乗込んだ先の現地に神様扱いされて始まったことだと思えます。ニューギニアかどこかに九州から行った人が酋長にまつり上げられ、日本に帰ってきたら早く戻ってきてくれと言われてまた出掛けて行きました。そういう意味で文明が一段高い所から低い所へ行けば、みんな神様扱いされるのです。日本の神様や天皇は江南や山東半島から乗り込んで来た冶金技術者ではなかったか。天孫がそこから降りて来たという高天原は中国ではないかと考えたのです。

それなら日本の神話は中国の神話に結びつくはずじゃないかという事から、段々と中国の古代史の方に興味が移って、ちょっと日本の各地の徐福伝説の後づけよりそちの方がおもしろくなって来たところです。徐福が実際におった徐富村というのが最近明らかにされました。徐福の徐に福は福じゃなくて富、徐富村というのですが、福と富は似た音です。佐賀の徐福が来たという町が諸富（もろとみ）町ですが、諸富とも読めますから徐福の徐と福です。そうすると諸富町は日本の徐富村だと考えていると、福という字と富という字が同じであるということから、史記の徐市の市という字が気になり角川の漢和辞典（字源）を調べました。これはおもしろい本で百科事典みたいで古代の事がいっぱい書いてあります。

古代の中国神話で一番最初に出て来るのは蛇の体で人間の頭をした伏羲と女媧という神様です。



伏 犧 (風姓)

その次が伏犧によく似た姿の神農で、三皇五帝といわれる中の三皇です。花札の三光もこれから来たのではないかと思うのですけど、三皇の最初にあらわれるのが伏犧で、次に表われるのが女媧となっているのですけど、本当は夫婦神のようです。蛇の尻尾をお互いにかまらせてHしているからです。同じ様にHしている像がインドにある歓喜仏ですが、こちらは象の頭で知恵の神様です。男が最も知恵をしぼるのはHをする時だからでしょうか。

印度の歓喜仏の両親は竜神シヴァと竜女パールパティです。伏犧と女媧は印度の竜神と竜女が中国化した神ですが、片方は定規を持っており片一方はコンパスを持っています。男と女の持物としてどれがふさわしいか考えて下さい。海洋に乗り出して方向を調べる測量術を持っていた文明人が神様の始めです。どうしてそんな事を考えたかというバンコックの建築学者の「水の神ナーガ」という本の中で、文明の始まりは海からだということが説かれているからです。氷河が溶けた時には一八〇メートル海が高くなっています。その逆に氷河時代は今より一八〇メートル海面が低く、ものすごい寒さですから生物はほとんど赤

道直下でしか生きられなかったようです。それが温暖期になるにつれて海没した島から大陸へあふれ出たというのです。生物は赤道海域から北やアルプスの山に向けて、気候の変化と共に潮の満ちひきのように移動を繰り返す中に、山人と海人に分れ、それが出合つて文明を生み出したというわけです。人類の発生は西のアフリカだけでなく、東のバリ島を中心とする東南アジアの氷河期の大陸でした。一八〇メートル海が下がると、現在の中国大陸に匹敵するぐらいの大きさの大陸でした。

最初の文明はむしろ南の海から発生したと著者のジュムサイ氏は言うのです。中国が印度を先進文明国と見ていたことや、エーゲ海の事を考えてもギリシヤ民が南化する前にエーゲ海の文明があつたことなど考えますと、彼の考えは正しいのではないかと思ひます。彼は海の民が信仰する竜神ナーガを、建築物の意匠の中から見つけ出し、構造的にはトラス構造を海の建築の特長としています。ナーガはナカで、中川とか、中津とか中という字は蛇をトーテムとする海人族の末裔がいた所の名ではないかと考えています。

伏羲と女媧という中国の創世神話にあらわれた夫婦神は、苗族、クメール族の方では兄妹になつています。兄妹が大洪水の時にヒョウタンの中に入りこんで生き残り、兄が妹を柱のまわりを追つかけて結婚したという話です。ノアの場合は箱舟に入るのですけど東南アジアの方ではヒョウタンの中に入った。ヒョウタンはフクゲともいいますから伏羲という音に近いですね。ハワイ



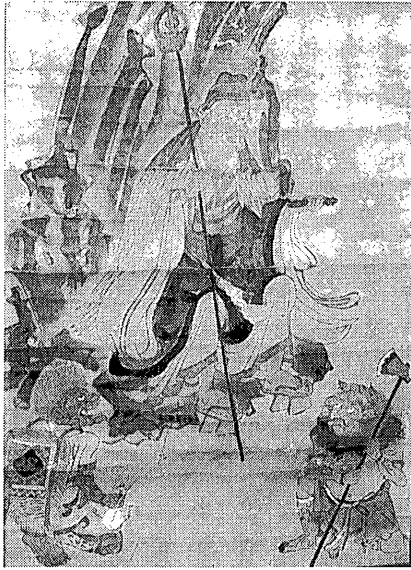
炎帝神農（姜姓）

とか沖縄の場合は姉が巫女で弟が摂政で、姉弟結婚していました。クレオパトラもシーザーの前には弟と結婚しています。南方系の海洋民では兄妹か姉弟の夫婦が始祖であるという伝承です。日本の最初に現われたイサナギとイサナミは竜神と竜女の日本版ではないかと考えられます。イサナというのは色々説がありますが、僕はイサナは鯨の事だと考えています。古代では勇ましい魚（ナ）と呼ばれました。キは男を表わし、ミは女を表わすのでイサナギ、イサナミというのは鯨の雄と雌、つまり鯨取りの部族のトーテムがイサナギ、イサナミであると考えたわけです。

鯨取りの部族は外洋に出ていますから、鯛や平目を捕る部族よりもテリトリーが広いですね。昔は大平洋から日本海、時には瀬戸内海の中まで鯨が入ってきた事があるようです。ヨーロッパの方ではネプチューンというのは海豚（いるか）に乗った神様といわれています。海豚と鯨とかを矛で取る部属が、鯛とか平目を網で取る半農本漁の海人の網張り争いを調停した大親分だったのではないか、つまり国定忠治や清水二郎長などのシマ（縄張）争いを調停する大前田英五郎のような部族が、鯨取りの海洋民で、それが黄海から支

那海にかけて部族連合をしていた。その連中が信仰していたのが大物主ではないかと思うのです。海洋民が信心する琴平さんのクンピーラは南方では鰐という意味です。あそこに祀られている祭神は大物主です。論語千字文を伝えたといわれる王仁（わに）氏は大物主を信仰していたのでしようか。大物主は大和では大神神社の祭神で蛇体の神です。火戸（ほど）姫に通った跡を赤糸でつけられたという伝説からして、丹生津姫と結婚した竜神のように思います。神武天皇の後の母親のホト姫（僕はボボ姫と同じ意味と思うのですが）が丹生津姫なら、神武天皇は朱を採掘する部族の入り婿となったともいえます。大物主は物部が信仰する神であり、物、ブツ、ブツ、は徐市の市と同じ音です。また徐富の富は、風と同音ですが、伏犧と女媧は風姓だと史記が記しています。徐福は徐水のほとりにたむろした風夷の末裔であったということです。紀州では風魔一族がいますが、熊野には徐福の墓が残っており、熊野海人に捕鯨術を教えたという伝説が残っています。

最初の鉱山技術では自然の風を利用したようです。例えば日本武尊が殺された伊吹山は、ものすごい風が吹きつけますから、岩穴に鉱石と薪を投入して火をつければ天然の熔鉱炉になります。物部はモノノフ武士を表わし、物は武器の意味を持ちます。物主とかブツ主、あるいはフルの神も全部風を利用する鍛冶の神である竜神ということになります。徐富村のある山東半島から、やって来た鉱山冶金の技術者達が信仰する神様が、印度の竜神・竜女、中国の伏犧・女媧、日本の



役の行者（役の君・小角）

イサナキ・イサナミだということになります。そうしますと、三皇のひとりの神農さんは誰かということになります。

神農さんというのは、薬の神様ですね。私の親父がものすごく信仰していました。神農の像の巻物があつて、それを親父は「役の行者」さんだといつて毎日おがんでいました。久し振りにそれを取り出して見ると、角にも見える髪形の仙人の姿で、前に赤鬼と青鬼がいます。僕は鬼退治の桃太郎じゃないかと思っています。

史記によりますと、神農は牛の頭で人間の体をしています。八坂神社の祭神素戔嗚命は牛頭天王の権化ですから、神農は素戔嗚命になります。イサナキとイサナミが生んだ三人の貴神は太陽神と月神と素戔嗚命です。太陽神と月神を竜神と竜女に置き換えれば、素戔嗚命が神農の日本版だと決めても良いように思えます。素戔嗚命は京都の祇園さんの神様で山鉾と関係します。日

本の祭りにはよく鉾が出て来ますが、鉾をもって鯨を取った海洋民が倭人部族連合であったからだと思います。

大物主を祭る琴平宮に近い屋島は、サヌカイト（讃岐石）といつて非常に固く、叩けばカンカンと金属性の音がする、鉾の原料にはもってこいの石を産出しました。黒曜石という矢じりの原料の出る姫島とか伊万里が、原始都市ともいえる古代の海洋民の根拠地でした。屋島ではサヌカイトのほか花崗岩も産出します。矢じりよりは武器としては大物であった斧や鉾の産地として、屋島に近い琴平山は古代の原始都市であったと思います。武器としては大物が出る屋島を根拠地とする海洋民は、潮の満ちひきを利用して豊後水道や紀伊水道から太平洋に乗り出していた。その連中が瀬戸内海の都市部族の縄張争いを調停する大親分となった。そこに鯛部族とか、平目を取る部族の美しい女性達がサービスに来て舞踊りしたのが龍宮城であつて、その龍宮の乙姫に婿入りした金属鉾山技術者が大物主に神格化されたと考えられるわけです。

琴平山は冬期には箸が飛ぶという程、中国山脈越えの寒風が吹きつけます。琴平神宮の絵馬には、嵐の中で金色の御幣が輝いて難破しか、つた舟乗りを助けています。列風の吹きすさぶ暗夜に、赤々と燃える熔鉾炉の火は、舟乗りに取って有難い灯台の役目をした筈です。火明命が大物主の別命となっているのは、熔鉾炉の火が灯台の役をしたからだと思います。

鉾山冶金技術が最初に開発されたのは、アナトリア山系に連なるイラン北方の高原地帯です。

そこが銅鉱石の宝庫で昔は天然の銅が産出していました。アナトリアは九州の国東半島と同様全体が一つの火山です。人類が火を扱い始めたのは、火山地帯であったと思います。そこは「御神火」として火種にことかかなかったからです。人類の文明の始まりは火を手に入れた時からだと思います。火を扱うようになったことで、寒冷期にも山岳部に残る人類が出現し、山人化していったと思うからです。次の温暖期には海から川を上ってくる海人と山人が遭遇し、山と海の文化がドッキングしてシュメール文明のような都市文明が出現したのではないのでしょうか。中国文明も北の文化である黄河文化と、南の文化の長江文化がドッキングして現代の中国文明につながる文明が生まれています。海から始まった文明が山と海にわかれては出会う分離と融合を繰り返して文明化が進展したという文明史を、最初から跡づけしてみたいと思っています。その中で中国の古代の伝承とか、日本の神話の中の真実と虚構を探り出すことは、自分がミステリー小説の主人公になったようなわくわくする気分です。

その入口になったものが徐福伝説で、徐福が水銀の朱を求めて日本の各地に散開したという部分を小さな論文にして、素人が出す「歴史研究」という雑誌に投稿しました。次の「徐福特集」号では、徐福の後ろに東洋のバイキングともいべき倭人連合のことを書きました。倭王はクリルタイ形式で選ばれた「安東將軍」で、連合海軍の長官であり、始皇帝の金は当時の最新鋭の捕鯨船団の製造に使われたという推論です。

水銀鉱脈のある地帯を流れている川は、吉野川という名がついています。紀州では吉野川と紀の川が同じです。吉(き)の川ですから、箕(き)氏朝鮮の箕一族が流れ込んだ結果だと思っ
ています。四国にも吉野川がありますし、そして例の吉野ヶ里、こっちにも吉野川があります。始
皇帝が生まれた土地にも岐(き)水があり、朱の産地でした。長江には「赤壁の賦」で有名な朱
の鉱石ば露出して断崖になっている所があります。水銀鉱脈の周辺に硫黄があると、硫化水銀に
なって、朱となって発色しているのです。それを見ればここは水銀が出るというのが分かります。
九州の彦山川の上流には川底や断崖で朱色が見られます。

徐福は日本に来て調べて見たら、朱があっちにもある、こっちにもあるというのでつい予定
より長く滞在したのでしよう。その事実を始皇帝に報告したら、始皇帝は故郷での体験で徐福の
話を信じる事が出来たんです。だから前にもまさる大金を出して、弩を装備した捕鯨船を作ら
せたくてです。史記では、大きな魚がおつてそれがじやますから、大きな船が要りますと言っ
ています。後に始皇帝自からが乗船して、大魚を弩弓で射っています。その後病気になるたと言
う事が書いてあるんですけど、その大きな魚というのは鯨だと思えます。そしてその鯨を取る部族
が倭人で、その大ボスが安東將軍、すなわち阿刀・安東など安曇族だと思っています。

東洋のバイキングであった倭人の大ボスが送り込んだ徐福達が、日本の各地で水銀だけでなく
金銀を堀って倭人の中国交易を支えた。代を重ねるにつれて数が増えるので、谷間の水田で間に

合わず、下流の芦原を開拓して水田耕作を拡大して、弥生文明を切り開く地主神の国津神となつていった。その後天津神を名乗る倭王が、このシマは自分たちの繩張りだからテラ銭を寄越せ、嫌ならお命頂戴しますと、いって船上で鉾を立て、おどかした。口惜しいけれど釜山の鉄鉦石を原料にした武器の力に抗せず、国津神は王権を返上した。しかし、それ以後、機会をねらつて王権の奪い返しを行った。日本の古代史は、政権をめぐる海の民と山の民の争い、それに加わつた新羅系と百済系の対立と融和、三つ巴、四つ巴の争いの文脈を明らかにしていくことで、百家争鳴の卑弥乎の根拠地の決め手も見つかるとは、楽しみにはしている次第です。

(北九州経済研究所所長)